



2021生誕100年
開館25周年
Toneyama Kojin Memorial Art Museum
利根山光人記念美術館

光人 と 北上

展勝地の一角にたたずむ、^{とねやまこうじん}利根山光人記念美術館。戦後の日本現代美術をリードし、国内外で数々の賞を受賞した国際的な画家、利根山光人画伯がアトリエとして建てました。没後は記念美術館として、北上の文化芸術の向上、発展を牽引し続けています。

今年、利根山画伯は生誕100年を迎え、同美術館は開館25周年となりました。また市は、文化芸術を生かしたまちづくりを推進する「北上市文化芸術基本条例」を施行しました。

節目が重なる記念の年に、画伯と北上市との関わり、美術館の歩みや文化芸術活動を振り返ります。

問い合わせ 生涯学習文化課 ☎72-8304



鹿踊と記念撮影をする
利根山光人



「日輪80''」(写真は作品全体ではありません)



北上駅の大陶壁画「日輪1982」

東北はもと縄文文化のセンターであった。北上市周辺に古くより伝わる代表的な民俗芸能 鬼剣舞と鹿踊には、日本人の原点ともいえるべき縄文のエネルギーがかくされている。勇壮 華麗 躍動 そしてきびしさを秘めた律動の中に、東北のエネルギーを、縄文の火を表現してみた。北上市発展の祈りをこめて、壁画の一部には展勝地の石を砕いて使用している。

(利根山光人による大陶壁画の注釈)

J R北上駅西口コンコース上部に設置されている大陶壁画「日輪」(写真上)は、利根山画伯が昭和56(1981)年に制作したもので、翌年に設置されました。

鬼剣舞と鹿踊をモチーフにした壁画は、縦3・5呎、横18呎、重さ約6トで、北上駅のシンボルとして観光客を出迎えています。特にも、巨大な鬼剣舞は迫力があり、来訪者や市民の平和な生活を守っているかのようです。

太陽の画家 利根山光人

利根山画伯は大正10(1921)年9月19日、茨城県結城市の生まれ。幼児期から創作活動を行っていたといいます。画家を目指したのは、旧制中学時代に教わった美術の先生が存在が大きく影響していました。

また、画家として出発した背景には

終戦後の混乱した社会があり、絶望感と再生への希望が活動の原動力になっています。静岡県と愛知県の県境にある佐久間ダムの記録映画を見て衝動に駆られ、建設現場に住み込んで絵画制作に取り組んだそうです。

このエネルギーシユな創作活動は、次にメキシコへと向かっていきます。昭和34(1959)年、メキシコを訪れた画伯は、マヤ、アステカなどの古代文明を取材し、その魅力に強く惹かれました。以降、たびたびメキシコに渡り、古代文明をモチーフにした情熱的な作品を数多く手がけてきたことから、「太陽の画家」と呼ばれるようになりました。

鬼剣舞、鹿踊の躍動と律動に衝撃を受ける

利根山画伯と北上市とのかわりが生まれたのは、昭和47(1972)年、岩手県芸術祭洋画部門の審査員として初めて来県したときのこと。帰途に北上を訪問した際、鬼剣舞と鹿踊を鑑賞し、その躍動感あふれる姿に圧倒されたそうです。以来、毎年のように家族や友人、メキシコ大使らと当市を訪問するようになりました。

民俗芸能に魅せられた画伯は、東北各地の民俗芸能の制作をライフワークの一つとしました。北上の地を訪れるたびに鬼剣舞と鹿踊をスケッチし、作品づくりに没頭していきました。

北上のアトリエで 民俗芸能作品づくりに熱中

利根山画伯は、民俗芸能のまち・北上で作品作りに本腰を入れようと、昭和49（1974）年、展勝地公園を見下ろす高台にアトリエを建設。画伯53歳のときでした。

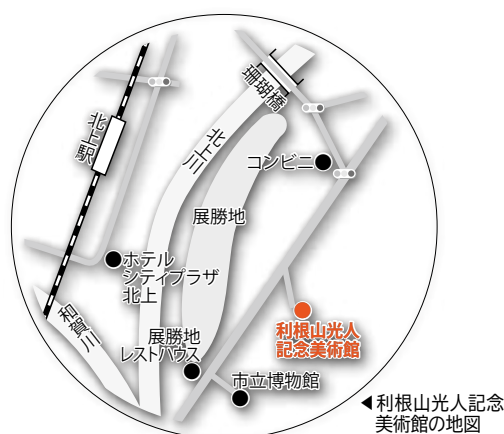
夏の間はアトリエに滞在。東北の祭りをモチーフとした制作に打ち込み、72歳で亡くなるまでの約20年間、ここで活動を続けました。

制作の間には、北上の各界の人々と交流を深め、北上・みちのく芸能まつりにも足しげく通いました。平成3（1991）年の第30回の同まつりには、メキシコに縁のある画伯の尽力により、メキシコ舞踊団が参加。一層華やかなまつりが繰り広げられました。

アトリエが美術館に

利根山画伯にとって、北上は第二の故郷のようでした。この縁もあって、画伯が亡くなった翌年の平成7（1995）年、夫人の彌恵子さんから、アトリエと作品の一部が市に寄贈されました。

市はアトリエを整備し、8（1996）年4月、「利根山光人記念館」を開館。この開館は、北上の文化芸術の振興、発展に向けて大きな意義がありました。同館は13（2001）年の開館5周年を機に、「利根山光人記念美術



館」と改称しています。

こじんまりとした館内には、大きなキャンバスに描かれた鹿踊や、東北の祭りがモチーフとなった絵画、メキシコで収集したオブジェなどが常設されています。また、毎年テーマを変えた企画展も開催され、地元の作家の作品も展示しています。

上 記念美術館の外観。メキシコの太陽がモチーフの絵が描かれている。展勝地公園が一望できるほか、晴れた日に玄関先に立つと岩手山がきれいに見える
左 躍動感ある作品「鬼剣舞」は、市庁舎1階スロープギャラリーに展示中



全国公募「大賞展」を開催し、 芸術の心を受け継ぐ

利根山画伯の功績をたたえ、志を受け継ぎ、若手芸術家を育成することを目的に平成13（2001）年、市は利根山光人記念大賞展「ビエンナーレ・きたかみ」を創設。2年に一度、絵画

過去の大賞作品と受賞者

回	開催年	大賞展	大賞受賞作品名	氏名
1	平成 14 年	ビエンナーレ きたかみ	夢意識的精神構築記 “暖かい愛情で潤う生命の樹”	傍嶋 飛龍さん (神奈川県)
2	平成 16 年		降臨	菊地 仁美さん (北上市)
3	平成 18 年		北国の祀り(おしらさま)	川杉 雅江さん (北上市)
4	平成 21 年	トリエンナーレ きたかみ	宴たけなわ、今夜も大忙し!	都丸 直子さん (愛知県)
5	平成 24 年		私たちのだいじな何か	菊池 咲さん (奥州市)
6	平成 29 年	開館 20 周年記念 大賞展(版画作品)	アンダー カレント ツー Under current 2	渡邊 加奈子さん (東京都)

作品を募集し、入賞作品の展示会を開きました。第4回から3年に一度の「トリエンナーレ・きたかみ」に移行し、24（2012）年までの間に5回開催しました。
28（2016）年に開館20周年を迎え、これを記念して翌年、版画作品を全国公募し大賞展を再び開催。多数の力作が集まり、美術の祭典として盛り上がりを見せました。

記念美術館を通じて広がる 市民の文化芸術活動

市民の文化芸術活動の一拠点となった同館では、記念美術館通信の発行による情報発信や企画展の開催、市民向け絵画教室を開講しています。

■企画展

利根山画伯の作品展や当市にゆかりのある作家の功績を讃えることを目的に開催しています。第1回は平成9（1997）年、開館1周年の企画として「メキシコ幻想」を開催。メキシコの祭りを描いた油彩、スケッチ、祭りで使われた面が展示されました。

今年7月3日から始まった中期企画展「阿吽 佐渡の鬼太鼓と日本のまつり展」は、50回目を数える記念の企画展です。開催日初日には関係者が集まり、式典が行われました。



50回目の企画展を記念して開催されたオープニングセレモニー（7月3日）



右_特別展示中の2作品「阿」(上)、「吽」(下)。佐渡市の郷土芸能・鬼太鼓が日本海を背に荒々しく描かれている
左上_絵画修復家の土師広さんによる修復作業の説明会を開催（6月19日）

左下_同館専任研究員による絵画教室を毎年開催。基本から学べるので、初めての参加でも楽しめる



■絵画教室

画伯の思いを受け継ぎ、多くの市民に絵画へ関心を持つてもらうと、毎年開設しています。鉛筆デッサンの技法や油彩画・水彩画の技法など初歩から学ぶことができます。完成した作品は展示会で披露されます。

受講後も仲間と制作活動が続け、画伯の名前から一文字取った「光の会」として展示会などが開催されており、絵画教室から市民の芸術活動へと広がりを見せています。

今年、利根山画伯生誕100年、美術館開館25周年、そして企画展50回目という記念が重なる年となりました。これは、画伯を顕彰する皆さんの思いと、画伯の絵画に親しみ美術館の諸活動に協力してきた「利根山光人記念美術館友の会」や利根山家、関係者の支えがあって迎えられたものです。

美術館には専任研究員が常駐しており、詳しい説明を聞くこともできます。身近な美術館として、誰もが気軽に文化芸術に触れることができるよう、小高い丘から皆さんをお待ちしています。

同美術館の案内や記念事業などの情報は、本紙Museum通信に掲載しています。また、記念美術館通信は同美術館や生涯学習センターで配布しているほか、市のホームページでも見ることができます。

